



私にとっての 高次脳機能障害サポーター というボランティア活動 「コージーズ」のサポートを通じて感じたこと

ボランティア活動をしようと思っただけ

今から15年ほど前でしようか。子供がまだ小さかった頃、休みになるとよく遊びに連れて行っていた近所の公園では、地域の夏祭りが開催され、障害をお持ちの方にやるバザーも開かれました。そこには子供たちが好きな駄菓子売りや焼きそば売り、輪投げといった光景が広がっていました。

威勢のよい掛け声の若い売り子の方の他にも、施設職員の方や、中には車椅子に乗られた方、さまざまな障害をお持ちの方がいらつしやったかもしれません。その姿は私の目に留まったとしても、その活動に参加しよう、お手伝いをしようと思いを巡らすまでには至りませんでした。

ちょうどその頃、私は会社で社員教育に関わる仕事を担当していました。製薬会社に勤務する私たちの使命は「患者さんの痛

みをお薬で取り除き、健康になっていただくこと」です。ですから、「患者さんの痛みって何？」を、どうすれば知ることができるだろうか」と素朴に疑問を持ち続け、解決策はないものかと考えていました。

そんなある日、こんな考えが浮かんできました。「そうだ！痛みを抱えた患者さんに直接触れ合うことで、社員たちが何か感じるができるかもしれない。そんな機会が持てないだろうか」と。

さっそく私は介護老人保健施設、病院等での介護研修の実現に向け、計画を立てました。北は北海道から南は沖縄までの社員たちがボランティアで参加できる介護の一日研修を設け、実際にお年寄りに触れ合う機会をつくらうと考えたのです。

そうなる、まずは研修の場となる施設を探さなければなりません。地域にある社会福祉協議会やボランティアセンターに向いて相談をしたり、遠いところは電話を

掛けたりしながら、何とか受け入れ施設を探すことができました。

しかし、初めて行う介護研修ですから不安もありました。「上手くいくのだろうか」。受け入れ先の施設の中には、一日研修の前にレクチャーをしてくれるところもありましたが、そうでないところがほとんどです。ボランティア初体験の社員が多い中、私は担当者として「障害をお持ちの方やお年寄りに対して何ができるだろうか」「何が得られるのだろうか」と心配が尽きませんでした。

しかし、実際に介護の一日研修が始まってみると、予想を超えた大きな反響が返ってきました。参加者の声の一例を紹介すると「お年寄りの方は、思ったよりも手物をつかむことができず、不自由なご様子がよくわかりました」とか「お体の不自由な中、一生懸命体を動かそうとされている姿に生きる元気をもらいました」などです。



金子 浩

コージーズサポーター

【かねこ・ひろし】

製薬会社勤務。薬剤師。ボランティア歴15年。



「こちらから何かを与えるのではなく、障害をお持ちの方やお年寄りの方から力をいただいた。そんな気づきのある一日研修に参加してよかった」という感想が数多く寄せられました。

私にはボランティアは無理！

職務として全国での介護研修を続けながら、研修を企画した私自身に介護の経験がないことが心のどこかにずっと引っか

っっていました。「このカレーは美味だよと人に勧めておきながら、食べてもいけない。何だかそんな気がして「これじゃいけない」と思いました。

そこで、介護の一日研修で社員を受け入れていただいた施設の一つ、世田谷区にあるボランティアセンター「ケアセンターふらっと」にお願いをして、私自身もボランティアとして参加させていただくことになりました。

初めて施設に伺ったのは、忘れもしません。年の瀬も押し迫った12月29日の夕刻です。施設職員のU氏からの紹介を受け、「ケアセンターふらっと」にお伺いすることになったのです。

通された部屋で案内役の職員の方をお待ちしながら、気分はわくわく、どきどき。どんなことができるのだろうか、期待半分、不安も半分。難しくはないだろうか。利用者の方と何を話したらよいのだろうか。上手く話ができるだろうか。障害をお持ちの方のお役に立つことができるだろうか等、いろんな思いが頭の中を巡っていました。

しかし来られた職員の方は、施設について簡単な説明をされただけで、何をすればいいのか特段教えてくださいませんでした。会社ではマニュアルに沿って仕事をすることが求められている私は、何をしたらよいのかわからずに困ってしまいました。そうこうしているうち、車椅子に乗ったYさんを紹介されました。私はとりあえず

横に座って「ボランティアの金子です。よろしくお願ひします」と明るく挨拶をしました。Yさんはニコッと微笑まれたように見えました。

私は話の取っ掛かりを探そうと「ご趣味は？」「お子さんはいらつしやいますか？」などとお聞きするのですが、何も返事が返ってきません。「あれれれ〜?」。もしかしたらYさんは一言、二言、単語を発せられたのかもしれないが、その時の私に聞き取る余裕などありませんでした。

私は、とにかく何か言わなきゃ言わなきゃとあせるばかりです。会話が続きかず、二人の間に長い沈黙の時間が流れました。私の背中にもう汗でびっしょり、のどもカラカラ。居ても立ってもいられずに、トイレへ行くと言ってその場を離れました。

トイレで真つ赤になった顔を洗い、ふと鏡を見ると、そこには無力な自分の姿が映っていました。何だか情けない気持ちになった私は、深くため息をついて一言「私にはボランティアは無理!」とつぶやいていました。これが、私が初めてボランティアを体験した日でした。

なぜ「コージーズ」のサポートをするようになったのか

そんな私ですが、高次脳機能障害者の自主グループ「コージーズ」でサポーターとしてボランティア活動を始めて、今年でもう15年になります。

「高次脳機能障害」について、国立障害者リハビリテーションセンターのホームページには次のように書かれています。

ケガや病気により、脳に損傷を負うと、次のような症状がでることがあります。

「記憶障害」

- ・物の置き場所を忘れる。
- ・新しいできごとを覚えられない。
- ・同じことを繰り返し質問する。

「注意障害」

- ・ぼんやりしていて、ミスが多い。
- ・ふたつのことを同時に行うと混乱する。
- ・作業を長く続けられない。

「遂行機能障害」

- ・自分で計画を立ててものごとを実行することができない。
- ・人に指示してもらわないと何もできない。

- ・約束の時間に間に合わない。

「社会的行動障害」

- ・興奮する、暴力を振るう。
- ・思い通りにならないと、大声を出す。
- ・自己中心的になる。

これらの症状により、日常生活または社会生活に制約がある状態が高次脳機能障害です。

高次脳機能障害の方の中には、外見では全く障害があるようには見受けられない方もいらっしゃると思います。ですが、実際には失語症などの症状があるため、コミュニケーションが上手いかず、日常生活において

さまざまな不自由や不便が生じています。ですが、高次脳機能障害をお持ちの方たちで構成される「コージーズ」の皆さんは、実に楽しい個性的な方々ばかりです。

たとえば、Tさんは元中華料理店の店主。バザーの時には、販売用のシュウマイ作りで大活躍です。片方の手にマジがありご不自由ですが、反対側の片手で器用にひき肉をシュウマイの皮に包み込んでいきます。さすが料理人です。

Aさんは元宝石商の社長さん。ダイヤモンド、サファイアなどの宝石の買い付けに遠く海外まで行き、忙しい毎日を送られていたそうです。前日まで元気に働かれていたのに、突然病気で倒れられ生死をさまよった後、後遺症が残り、それまでとは全く違った不自由な生活を余儀なくされました。

「コージーズ」の皆さんは私より先輩の方が多くのですが、ほぼ同世代。子供のことや家族の悩みを共有できるせいか身近に感じて、親しみが沸いてきます。そして何より、「コージーズ」の皆さんとお付き合いをしていると、ただ一緒にいるだけでホッとするので。

具体的なボランティア活動とは

ここで、「コージーズ」で行っている具体的なボランティア活動をいくつかご紹介しましょう。

「コージーズ」では、毎年夏に開かれる世田谷区民まつりでバザーを出店します。

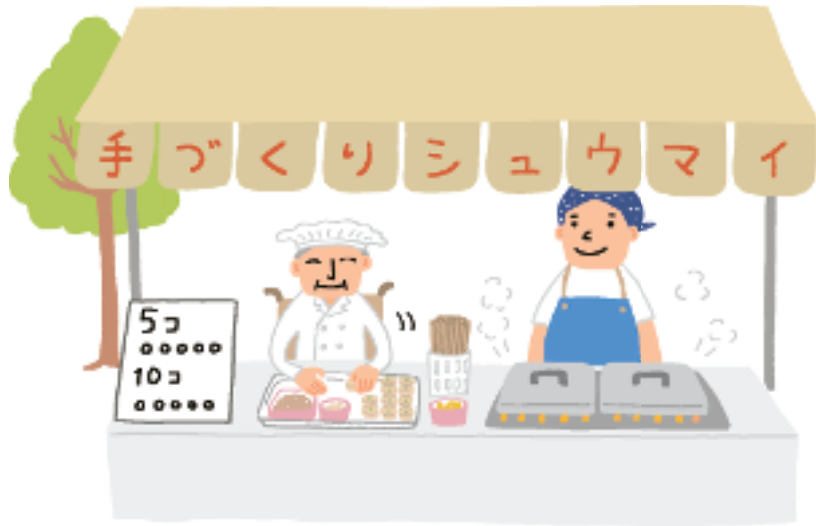
その際、ボランティアのメンバーは障害をお持ちのメンバーと一緒にシュウマイを作り、販売のお手伝いをします。にぎわうバザー会場で、親子連れの方などに「シュウマイ美味しいよ〜」と声掛けをしたりします。そんな時、売り場のテントの中では、車椅子に乗った元中華料理店店主のTさんがニコニコと笑って楽しそうにしています。

また、障害をお持ちの方が、リハビリを兼ねて定期的にコンサートを開く際、我々ボランティアは障害をお持ちの方が活躍しやすいようにお手伝いをします。

たとえば、ステージ上に演奏者が座るイスを用意したり、譜面台を準備したり、マイクを口のそばにセッティングしたりと、ボランティアはできる範囲で自主的に何でもやります。パソコンが得意な人は、パワーポイントを使ってステージの演出を盛り上げたりもします。

高次脳機能障害をお持ちのAさんは、失語症のため、上手く言葉を発することができません。何か仰りたいことがあっても、発声が困難なためコミュニケーションが上手く取れません。そんなAさんですが、何とステージに上がられ、昔カラオケでよく歌われていた曲が流れると、ゆっくりとですが歌詞が口から出てくるのです。

日頃から大変ご苦労をされてリハビリを重ねられた成果だと思えますが、まさに



奇跡の瞬間で、感動的な瞬間です。そばで聞いているこちらにも楽譜を押さえる手が震え、涙でかすんで歌詞が見えなくなるほどです。こんなステキな感動をもらえるのも、ボランティアの醍醐味ですね。

ボランティア活動を始めてからの変化とは

人間誰しも明日のことはわかりません。いつ自分自身が、病気やケガで高次脳機能障害の当事者になるかわかりません。昨日まで会社員として、公務員として、自営業

者として、働いていた方が、突然倒れて障害を受け入れなければならぬ事態が生じることもあるでしょう。

今まで私は車椅子に乗られた方をお見受けした時、何かしてあげたいという気持ちがあっても、何をしたらいいのかわからず、手助けすることができないでいました。どこかで見えない壁をつくっていたんじゃないかと思います。

「障害をお持ちの方に対して手助けをするのではない」。介護の一日研修を受入れてくれた世田谷区のボランティアセンターの名称「ふらつと（b）」のように見守り、一歩下がって、自らが係わり合いを持つこと。私にとってボランティア活動とは、障害をお持ちの方のお手伝いをするというよりは、必要があればお手伝いをする。それ以外は見守ってお話に耳を傾けることです。

そのことを通じて、私自身の心のリフレッシュと言いますか、雪が解けて春の日差しが降り注ぐ、何だかふんわりとした、そしてホッとした感じが体に残ってくるのです。

企業に勤めているため、普段は売上必達主義や他社との競争に勝つことが求められています。仕事では、多くの事業者さんたちとのお付き合いもあります。時には相手に持ち上げられることもあり、何だか自分が偉くなったような錯覚を覚える時もあります。そんな時は、ふと立ち止まって、一人のボランティアとして目の前の方と接すること、自分の原点に戻れるのです。

物の見方、感じ方

私がボランティア活動を通じて得た最大の収穫は、日常の何気ない小さな出来事に感謝できるようになったということです。少しではありますが、「できて当たり前のことなど何一つない!」「何気ない、今まで当たり前でできた一つ一つの行為がありがたい」と感じるようになりました。

たとえば、お箸を持って食べ物を口に運ぶこと。美味しいと感じること。電気がついたり、蛇口をひねると水が出てくることなどもそれ自体すばらしいことで、ありがたいことです。ある意味、奇跡なんだというのを改めて感じるようになりました。

今やっとわかったこと

私にとって記念すべきボランティアの初日。受け入れ施設の職員の方が、何をどうすればいいのか、何も言ってくださらなかったあの日のことを思い出します。

私はよくわからないまま、とりあえず障害をお持ちの方の横に座りました。職員の方は「聞こえない声に耳を、心を傾け、とにかく命を感じる!」と教えてくださったのではないのでしょうか。今やっと、その時の疑問が自分の心の中で解けてきたような気がします。ゆつくりと雪解けのように!感謝。